

2022年度ジェンダー・セクシュアリティ研究 レインボー賞受賞論文について

オリビエ・アムール＝マヤール

(2022年度選考委員長)

生駒夏美

(推薦コメント)

カレン・ベヴァリー F. M.

(推薦コメント)

「ジェンダー・セクシュアリティ研究レインボー賞」は、ジェンダー研究センターの設立に尽力され、2014年にご退官された田中かず子教授により創設されました。賞の目的は、本学に提出された学士・修士または博士学位論文の中で、優れたジェンダー・セクシュアリティ関連研究を表彰し、そしてジェンダー・セクシュアリティ研究の一層の発展を期待するものです。2022年度は、優秀な論文が複数推薦され、小野彩水さんの学士論文『『ノンバイナリーがわかる本』翻訳を通じた日本へのノンバイナリー概念の導入』と、中島遙さんの修士論文「理想の人形——「型」として描かれる女性身体」に決定しました。

小野さんの受賞論文は、エリック・ヤングの *They/Them/Their: A Guide to Nonbinary & Genderqueer Identities* (2019) の日本語訳を扱い、テキストの変化や日本での出版による社会的効果、訳書の読書と分析研究が個人に及ぼす影響について検証しています。訳者と編集者への調査によって、ジェンダー関連書の翻訳がもたらす様々な社会的・個人的影響を考察している点の独創性が認められました。

中島さんの受賞論文は、日本文学に登場する人形の表象に着目し、ジェンダー・人種・ナショナリズムの観点から分析しています。女性身体の表象に顕れる性規範や、その時代の地政学と女性差別や人種差別の関わりを丁寧にテキスト分析している点が評価されました。

The Rainbow Award for Gender and Sexuality Studies in AY 2022

Olivier AMMOUR-MAYEUR

(AY2022 Selection Committee Chair)

Natsumi IKOMA

(Recommender's Comments)

Beverley F. M. CURRAN

(Recommender's Comments)

The Rainbow Award for Gender and Sexuality Studies was established by Professor Kazuko Tanaka, who founded the Center for Gender Studies (CGS). The award's purpose is to recognize outstanding gender and sexuality-related research in B.A., M.A., or Ph.D. dissertations submitted to the ICU and encourage further development of gender and sexuality studies. Several outstanding papers were nominated for the academic year 2022, from which, Ayami Ono's senior thesis, "*They/Them/Their: The Introduction of the Concept of Nonbinary in Japan through Translation*" and Haruka Nakajima's Master thesis, "*An Ideal Doll: Female Body as a Mold,*" were selected.

Ono-san's award-winning senior thesis traces the trajectory of Eric Young's *They/Them/Their: A Guide to Nonbinary & Genderqueer Identities* (2019) in Japanese translation and explores the textual changes; the social implications of its publication in Japan; as well as reflecting on the impact of reading and researching the book's translation on the student's own identity. This senior thesis is marked with originality for its engagement with translator and editor, revealing how this gender-related text circulated in translation with anticipated and unexpected personal and public effects.

Nakajima-san's award-winning Master thesis focuses on the motif of a doll in Japanese literature, and analyze the stories and films from the perspectives

of gender, race, and nationalism. It was highly evaluated that the gender norms behind the doll metaphors and the relationship between geopolitical contexts and gender/racial discriminations were examined in close analyses.

『ノンバイナリーがわかる本』翻訳を通じた 日本へのノンバイナリー概念の導入

小野彩水

男性にも女性にも所属しない性自認、「ノンバイナリー」は、インターネットの普及と共に世界的に認知が広まった。2019年、英国の出版社より、ノンバイナリーアイデンティティについての単行本 *They/Them/Their* が出版されると、同書は2021年、明石書店より『ノンバイナリーがわかる本』という邦題にて、日本語訳が出版された。これは、日本における初のノンバイナリーアイデンティティの概説書となった。本稿の目的は、ノンバイナリーという概念が、*They/Them/Their* の翻訳を通じて日本社会の空間・時間・意味の網目にどのようにその基礎を築いたか、を明らかにすることである。

本稿の論展開は以下の通りである。まず導入として、ジュディス・バトラーの理論を紹介し、本稿におけるジェンダーアイデンティティの枠組みと、その有用性について述べる。第一章では、原著 *They/Them/Their* における、ノンバイナリー表現の実践を四つの観点から考察する。四つの観点とは具体的に、(1) 筆者・執筆の動機・目的について、(2) パラテキストの仕様、(3) 本の構成・ノンバイナリー概念の導入方法、(4) 筆者の経験の記述方法、である。第二章では、前述の四つの観点に基づき、翻訳本『ノンバイナリーがわかる本』における、ノンバイナリー表現の実践を検討する。この検討においては、ミクロ、マクロの二つの視点からアプローチを行う。ミクロな視点は、緻密な翻訳の取り組みに着目する分析視点である。本の構成や単語の選択に着目し、その選択がもたらした内容の変化や、その変化がもたらす読者への影響について考察する。マクロな視点は、翻訳の意図や出版の戦略から翻訳の特色を明らかにする分析視点である。本稿では、『ノンバイナリーがわかる本』の翻訳者である上田勢子氏、またノンバイナリー当事者であり編集に携わった辛島悠氏にインタビューを行った。翻訳の過程や、出版の背景・目的について、両インタビューを通じて得られた知見を基に考察を行う。第三章では、第一章・第二章を通じて述べられた内容を総括し、バトラーの理論を再度参照することで、改めて翻訳のもたらす意味と影響に

ついて検討する。加えて、器械的翻訳と解釈学的翻訳という二つの翻訳モデルの方法論を通じて、翻訳理論の観点からも『ノンバイナリーがわかる本』の意義や日本社会への影響、今後の展開について考察する。最後に、以上の全てを踏まえ、本稿では取り扱うことのできなかった議論や、将来に渡った継続的な研究の必要性、そして今後のノンバイナリー表現に必要な表象の多様性についても示唆する。

本稿の知見として、『ノンバイナリーがわかる本』は、原著におけるノンバイナリーの言語実践を日本語において再構築すると共に、日本文化に固有の社会規範に挑戦し、攪拌する可能性をも有していることが明らかになった。本稿は、段階を踏んだ詳細な議論を通じて、ノンバイナリーという存在が日本語においてどのように表象され、日本社会に導入されたかについて明らかにした。ノンバイナリーという概念は、その表象のみならず、学術的な議論の場においても未だに研究の余地を多く残している。本稿は、ノンバイナリーの表象を考える第一歩であるとともに、ノンバイナリーについてのさらなる研究への礎となる、という点で意義があると考えられる。

They/Them/Their: The Introduction of the Concept of Nonbinary in Japan through Translation

Ayami ONO

They/Them/Their: A guide to Nonbinary & Genderqueer Identities by Eris Young was published in September 2019. It discusses nonbinary identities based on the author's experience, surveys, studies, and interviews. The author, Young, is an American queer nonbinary trans writer with degrees in linguistics from the University of California, Los Angeles, and the University of Edinburgh. *They/Them/Their* was translated in Japanese by Seiko Uyeda, and published in 2021, as *Nonbinary ga wakaru hon*. It is the first overview book about nonbinary in Japan. The translator, Seiko Uyeda, is a translator living in the United States since 1979, who had translated many books regarding social minorities including LGBTQ+. The editor of this book is Yu Karashima, who recognises themselves as a nonbinary person.

This paper aims to reveal how the nonbinary concept in Japan has created its foundation in space, time, and the webs of significance, through the Japanese translation of *They/Them/Their*. It includes the interview with the book's translator, Seiko Uyeda, and editor Yu Karashima, as part of a detailed analysis of the translation's effectiveness, cogency, and social impact. In short, the overview of *They/Them/Their* will be in Chapter One; the comparison and analysis of translation with interviews will be found in Chapter Two; and an analysis of translation theories and a consideration of further possibilities of nonbinary representation will comprise Chapter Three.

In detail, the thesis starts by assembling and organising the relationship between language and gender identities including the introduction of the discussion of nonbinary, as it shows the importance of a book about nonbinary in the first place. It clarifies the significance of *They/Them/Their* and its Japanese

translation.

Next, a close look and analysis of the original book through four perspectives: 1) the author, motivation, and purpose; 2) the paratext; 3) the structure of the book and introduction of the concepts; and 4) the representation of the nonbinary experience, will show concrete examples of the practices of nonbinary representation in the book. Using the same four perspectives, a close look and analysis of the translated book follow. This will include the two interviews with translator, Seiko Uyeda, and editor Yu Karashima. The interview with Uyeda will provide more profound insights into the translation process, which shows both the possibility and limitations of the translated book. The interview with Karashima will show the background process regarding the publication and its publication significance.

Then, it will summarise the discussion and develop further discussions on the meaning and influence of the translation. The translation will be examined through two translation models: the instrumental and hermeneutic models. As the instrumental model, skopos theory introduces the idea of aim-based translation as an act. The hermeneutic perspective, with its idea of translation as interpretation, critically shows the position of the translation through its cultural background and insisted on its limitation, significance, and further possibility. With these examinations, the thesis concludes how the nonbinary concept in Japan has created its foundation in space, time, and the webs of significance, through the Japanese translation of *They/Them/Their*. The thesis then discusses its limitation, which is the lack of an argument regarding the body. Finally, the thesis mentions the potential for disturbance or subversion of the gender binary in Japan through the representation of nonbinary, as well as suggesting the necessity of continual research on the nonbinary representation.

As a whole, the thesis provides the idea of nonbinary representation, and creates the foundation of nonbinary research for the future.

理想の人形——「型」として描かれる女性身体

中島遙

本研究のテーマは日本文学における「人形として描かれた女性」の表象分析である。小説『青塚氏の話』（谷崎潤一郎、1926）『眠れる美女』（川端康成、1960-1）及び映画『空気人形』（是枝裕和、2009）の3作品における女性身体表象について、ジェンダー、人種、ナショナリズムの観点から分析をおこなっている。これにより、女性身体表象の変遷と女性身体に反映された性規範、男性中心性、人種主義を見ることを目的としている。

日本には、なぜ「女性」の姿形をしたロボットや人形、アンドロイドが多いのだろうか。本研究はこの疑問から始まった。ロボットなどの製造技術は年々発達し、精巧なつくりの「人間に似た」ものが増えてきている。そうしたロボットは「若く美しい女性」であることが多い。だが、ロボットを「女性らしく」造型し、駅や公共施設に設置することは「当たり前」として受け止められてよいのだろうか。これは「サポート」といった「女性」に期待されやすい性役割を反映しているのではないか。この点を追究するため、本研究は「人形」として描かれる女性が登場する文学／映像作品を選び、時代ごとの特徴や共通点を考察している。

分析にあたってはテキストに加え、時代背景や作品が発表された時代の文化表象を考察した。また、ジェンダー、レイシズム、ナショナリズムといった複数の視点から分析することを重要視した。それぞれは独立した問題ではなく、繋がっており、表象にも反映されているからだ。

1 『青塚氏の話』

第1章では1926年に書かれた谷崎潤一郎による小説『青塚氏の話』を分析している。男性映画監督がファンの男性と出会い、彼の映画女優への執着に恐怖を感じつつ引き込まれていくというストーリーだ。最後には男性が映画女優そっくりの人形を作っていたことが判明する。その女優「由良子」は男性同士の会話に出てくるばかりで、登場場面は少ない。そこで、本研究では由良子の描写に注目し「女優としての由良子」「人形として描かれる由良子」の2点から分析している。

「女優としての由良子」は「アメリカ女優」のような美しさをもった存在として描かれており、当時の日本/日本映画産業の「アメリカ」への憧れをみることができるといえる。また、蠟人形に関する先行研究をもとに、なぜ「由良子人形」が必要であったのかを考察している。

2 『眠れる美女』

第1章をふまえ、第2章では川端康成の小説『眠れる美女』（1960-1）について分析している。本作の舞台は娼館「眠れる美女」だ。ここでは少女たちが薬で眠らされている。主人公は初老の男性であり、彼の視点から宿と「眠れる美女」たちについて語られる。本研究では、山崎明子の論を参照し、「眠れる美女」たちに投影されている理想化された女性像を分析している。また、眠れる美女の一人である「黒い娘」の表象から戦後日本のレイシズムについて考察をおこなう。そして、こうした「眠れる美女」たちが望まれる背景にある男性性についても分析する。

3 『空気人形』

最後に、2009年の是枝裕和監督による映画『空気人形』の分析をおこなう。ラブドールを主人公とする『空気人形』はこれまでの2作と比べさらにあどけなく幼さを強調した外見と仕草をしている。1990年代からの、アイドルやラブドール産業を始めとした「少女」の流行から「少女」と性的対象化について考察する。また、韓国の俳優ベ・ドゥナが空気人形を演じていることから、日本におけるオリエンタリズムについても言及する。

以上の考察から、女性が時代ごとに理想像を投影されており、より「若い」「人形化」した女性像が作りだされているといえる。また、その背景には「日本人男性」中心の社会構造があると考えられる。

An Ideal Doll: Female Body as a Mold

Haruka NAKAJIMA

This thesis analyzes female representation in Japanese literature and film; *Aozukashi no Hanashi* (Tanizaki Junichiro, 1926), *Nemureru Bijo* (Kawabata Yasunari, 1960-1), and *Air Doll* (directed by Kore-eda Hirokazu, 2009). In all three works, female characters are represented as a “doll.” This thesis focuses on how and why the female body has been represented as a doll and idealized in Japanese culture.

I have been wondering why many robots or dolls in Japan are created as women. As the technologies develop, more and more “human-like” robots are produced, and they are at the station or office to guide and support people. Many of them are gendered as female. Although this situation is accepted as “normal,” it is questionable why robots are characterized as a certain gender. Therefore, I chose to analyze representation in culture to understand this phenomenon more thoroughly.

To analyze the text, this thesis examines the historical and cultural background of each novel or film. Also, I focus on several aspects such as gender, race, and nationalism. Each issue is not independent but related to each other, and I believe it is important to examine the topic from an intersectional aspect.

1 *Aozukashi no Hanashi*

The first chapter analyzes *Aozukashi no Hanashi*, written by Tanizaki Junichiro in 1926. This story is narrated as a note a film director left to his wife. His wife Yurako works as an actress and has been featured in his films. In the letter, he confessed that he met a man, who is a big fan of Yurako. The man was obsessed with Yurako and collected films and remembered Yurako’s body in detail. In the end, it is revealed that he created dolls, which look exactly like

Yurako.

This thesis focuses on the representation of Yurako from two aspects: Yurako as an actress and Yurako as a doll. The depiction of Yurako as an actress shows the influence of American film in Japan. Tanizaki describes her beauty as a (white) American actress. It shows that American films influenced the beauty standard in Japan. Also, former research such as Laura Mulvey points out, women have been described as objects to be gazed by men. Therefore, Yurako is shown as a woman who has an “ideal” attractive body.

Moreover, Yurako is represented as a doll at the end of the story. By introducing Aramata Hiroshi’s research of dolls such as wax figures, I argue that Yurako is portrayed as “attractive” not only because she is an actress but also because she is a “doll.”

2 *Nemureru Bijo*

In the second chapter, I analyzed Kawabata’s *Nemureru Bijo*. “*Nemureru Bijo* (Sleeping Beauty)” is the name of the brothel the protagonist visits. In the brothel, young and beautiful women are narcotized by medicine. Eguchi, the protagonist, visits the brothel and sleeps beside them.

This thesis examines the story by focusing on gender and race. Based on Yamasaki Akiko’s analysis of female representation in culture, I analyzed how “sleeping beauties” are portrayed as “ideal” women to the protagonist. On the other hand, it is important to consider who and why these women are desired. By examining historical and cultural background, I also discuss masculinity in Japanese culture.

3 *Air Doll*

In the last chapter, I analyzed a film, *Air Doll* (directed by Kore-eda Hirokazu). In this film, the protagonist is a sex doll which is called “Air Doll.” One day she suddenly became able to talk and behave like a human, and she started working at a video rental shop.

Air Doll's appearance and behavior looks like an innocent child. I consider Air Doll reflects "Shoujo culture" in Japan, which became popular around 1990s. In subculture and media, young women(shoujo) tend to be portrayed as innocent and sexual.

Moreover, I discuss Orientalism in this film. The film features Bae Doona, Korean actress, as Air Doll, and she plays a similar role in a Hollywood film after *Air Doll*. This thesis criticizes Orientalism in Japanese culture, which portrays other Asian women as Others and "idealized" figure.

This thesis criticizes representation of women in Japanese literature and culture by focusing on "women portrayed as dolls." This perspective shows how "ideal women" has been constructed and represented.